



小説 狩野 景

挿絵 桐島サトシ

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

第一幕

怪人奇貌侯爵現る

006

第二幕

國護職、咲妃見参！

037

第三幕

怪人の罟

065

第四幕

終わりなき狂乱の宴

159

終幕

251

登場人物紹介

Characters



すざくおおじ きき
朱雀大路 咲妃

帝都を陰から守護する者『國護職』宗家の一人娘。気位が高く意地っ張りな所があるが、正義感が強く優しい人柄。

みやむら
宮村 すみえ

咲妃の身の回りの世話をする小間使い。気立てがよく、従順で明るい性格の持ち主。

きみょうこうしゃく
奇貌侯爵

帝都を騒がす婦女陵辱魔。真紅の礼服とマントに身を包み、奇怪な面で顔を隠している。

第三幕『怪人の罖』より

「くふ……」

いつもは自分からその巨乳の狭間に、小型拳銃を忍ばせている。異物を挟み込むことは慣れているはずなのに、咲妃は捏ね回しながら押し入る鋼の感触に小さく息を漏らした。だがそのわずかな反応を赤怪人は見逃さない。

「ここがよいようだな」

笑いを噛み殺すようにつぶやくと、銃把を握った手を咲妃の胸元で大きくくねらせる。

（お、お乳を……!! んん、くっ……）

銃身に掻き乱され、乳房全体がぐねぐねと生き物のように蠢いた。混ぜ合わされる快感に元から大きな乳房がますます張り詰めてくる。その膨張は窮屈さを伴う官能をもたらした。酸素を求めて喉が上向く。その伸び上がった身体を奇貌侯爵が背後から抱きすくめる。

「はうっ！ は、放しなさい!!」

おぞましさに振りほどこうとする咲妃。しかしその抵抗を遮るようにもう一丁の銃が腹部へと滑り、くびれた細い腰をさする。

乳房のように甘い快感が湧き上がるほどではないが、無防備な腹を物騒な武器でまさぐられる不安感がまとわりつく。

それを知ってか奇貌侯爵は、形よくへこんだ浅い臍穴へそを銃口で虐めるように掘り弄くる。そしてじりじりとじれたい速度を保ちながら、筒先をさらに下へと滑らせていった。

「あ、あ、や……」

わずかに声がかぼれてしまった。レースで飾られたシヨーツの上を滑り、銃身が恥丘の膨らみにのしかかかってきたのだ。滑らかな絹越しに、柔らかく茂った秘毛を撫で乱す。さらにその先へ突き進もうとする鉄を、咲妃は反射的に払い除けようとした。だが耳元で怪人が穏やかだが真剣な脅しを囁く。

「我慢できぬか？ ならば代わりにまたあの女中で遊ばせてもらうぞ」

硬直したように咲妃の手が空中で止まる。

「どこまでも卑劣なっ！」

従いながらも怒りを露わになじる。薄笑いを浮かべながら奇貌侯爵は彼女への返答とばかりに、スルンと銃身を股ぐらに滑り込ませた。

「はうんっ!!」

濡れふやけてしなしなになった花卉を硬い物に擦り上げられ、咲妃は電流が走ったように跳ね上がった。絹のシヨーツは熱汗と愛液を吸い、ほとんど一体と化したように秘め花びらに貼りついている。無礼な刺激から大切な箇所を守るところか、ヌルヌルと滑る肌触りで望まざる快感を増幅してしまうのだ。

五・五インチのパレルがぴたりと閉じる両腿の狭間、股ぐらの下に空いた三角形の隙間を占める。その鋼筒が敏感部にあてがわれる太く逞しい感触は、未だ触れたこともない男



根の不気味さを咲妃に与えた。

本能的な危機感に身を強張らせる。だが、しなやかな内腿をギュッと引き絞ったその反応は、ますますその硬棒を弛みほぐれた陰唇に押しつけることとなった。

「やはり、使い慣れた道具は恋しいと見える。毎晩、これで慰めていたのか？」

銃把を伝わる感触に怪人がなじる。

「なにを失敬なっ！ わたくしはそのようなこと……あひっ!!」

侮辱に声を荒げ反論しようとする。だが奇貌侯爵はやかましいとばかりに、ピースメイカーで彼女の股間をグリグリと穿ったのだ。

弛みきった秘裂の敏感な粘膜が、ショーツの白絹と混ぜ合わされるように掻き乱された。振れ動くレースの下着は陰部ばかりか尻肉にまでもみつちりと食い込み、汗濡れた敏感肌を擦りつける。渦巻くような熱感が沸き立ち、染み出る牝汁の量を増やした。

「ひうっ！ あ、うあああ……」

途端にクチュクチュと淫靡な音色が蠢き揺れる袴の下からこぼれ出る。その音と混ざり合いながら咲妃の喉からは必死で堪えようとするしゃくり上げるような喘ぎが漏れ始めた。

太く硬い感触は手に取らなくてもすべすべとした手触りまで思い浮かぶ。なによりも自分の身体に近しい器物で陰部を弄くられる。自慰を強制されているような気恥ずかしさと悦感が咲妃を責め立てる。

(こ、こんなのに……負けてなりませんかっ！)

しかし彼女はそれ以上乱れることはなかった。淫媚香で感度を増した肉体は、わずかな刺激にも脳をとろけさせるような快感が生じているはずである。事実、敏感な部分をまさぐられるたびに、咲妃は声を漏らしてビクンと打ち震えた。しかしそこまでなのだ。どれだけ工夫を凝らしても、彼女は鍛え上げた強靱な精神で、肉欲を抑え込んでしまう。

優越感に浸っていた奇貌侯爵に焦りが生じる。彼は道具では生ぬるいと、銃から自分の指を使つての刺激に切り替えた。

「あふっ！」

豊満な乳房を大胆に揉み捏ねられ、太い熱息が逆る。不器用な道具嬲りから一転した指の感触はいままでと比べ物にならぬ快感を咲妃にもたらしたので。

成長するにつれ膨らみを増し、ついには掌に収まらなくなった大きすぎる乳房。戦いの邪魔くらいにしか思つていなかったその柔肉が男の手の中で踊ると、理性が宙に浮き上がりそうになる。

吊り気味の目元を切なく潤ませ、身を震わせながら悦楽に耐える。だが怪人の指先は、硬勃ちした乳首を挟み込んで擦り上げるといふ追撃を加えたのだ。

「ハああんッ!!」

キリリと引き絞つていた唇がだらしなくほどけ、甘く粘った嬌声を吐き出してしまった。

小さな突起を弄られたただけだというのに、爪先にまで熱い痺れが突き抜ける。思わずしなを作るように腰がぐにやりとくねってしまった。その脱力した身体を支えながら、宿敵は粘りつく声で囁く。

「おやおや、どうやら貴女の物騒な愛玩具よりも気に入っていただけたようだな、私の指は。では、存分に堪能してくれたまえ」

鼠蹊部そけいぶをまさぐる左手の指先がショーツの内側へと忍び込んできた。密着した濡れ布を剥がされ、湿り肌がひやりと外気を感じる。そのこそばゆさに身じろぐ最中、ぐちゆりと、柔らかな牝花弁が押し分けられた。

「——!! ツッ、くあっ!」

腰から膝までの力が一気に抜け落ちてしまった。敵に支えられていなければそのまま転倒してしまっただけかもしれない。だが牝花弁をまとわりつかせ押し入った指は咲妃の秘部をさらに弄くる。

じゅるんと敏感な粘膜を掻き分けられる。ピクンと股関節が震え、またしてもよろめいたと同時に、咲妃はヌルヌルの汁に浸った男の指に秘裂の上端で粒勃ちする、ちっぽけな肉豆を摘み上げられた。

「あぐあああうっ!」

悲鳴のような嬌声が放たれる。問答無用の気持ちよさだった。軽く摘まれただけなのに

ジンジンと痺れる快感が脳の芯にまで突き刺さる。

(あああつ、ここ……なんなのお……?)

初めて味わう陰核への刺激に戸惑いを覚える。自分の身体に、このように並はずれた快感をもたらす部位があるなどということが信じられない。

(これじゃ、負けちゃ……ううっ……)

とどまることを知らぬその態度のよさに苛立ちさえ覚える。だが奇貌侯爵の淫指は、彼女の困惑を弄ぶように、悦楽の肉芽を攻め続けた。

指腹ですりすりと撫でさすられるように、包皮が剥き脱がされる。幾多の女を幾多の狂気に陥れてきた熟練の手業がその生クリを、まるで男性が自慰をするように上下に扱き上げられた。

「んっふはあああつ！」

憤りもなにもその瞬間吹っ飛んだ。剥き出しの敏感粒を乱暴に扱われ、痛みすら感じる。だがその痛みがすぐに快楽の疼きとなって理性を攪拌するのだ。股間からどろどろと腰が溶け落ち、快感だけを感じる液状のものへと変わってゆく。そのような感覚に陥り始めた。だが――。

「こ、んなの、気色悪い、だけ……」

ゆっくりと振り向く咲妃の口からは、弱々しい声ながらもきっぱりと拒絶する言葉が放

たれた。

「なに——!？」

信じられないとばかりに驚愕を表す奇貌侯爵。滲み出た汗に青白い顔を濡らしながら、気高き視線で睨めつける國護職の娘。彼女の薄い唇からは一筋の血潮が流れ滴っている。咲妃は、舌の先を自ら噛み傷つけることで、陰核からの快感を押し退けたのだ。

「ふん、しぶとい娘だ。ならばこれはどうだ？」

同様に声を震わせながら一旦咲妃への攻めを中断すると、怪人は彼女の銃を携えてすみえの側へと向かった。小間使いに危害を加えるつもりかと、咲妃が色めき立つ。だが、侯爵は手に持った銃を仰向けの少女の腹に載せたのだ。

「——ふあん？ あ、これ……咲妃、お嬢さま……」

生暖かい鉄の重さに呆然としていたすみえが息を吹き返す。淫欲に狂わされながらも、忠実な小間使いは主の名をつぶやき、弱々しい笑みを浮かべた。咲妃の胸に熱い物が込み上げる。だがその表情は一瞬にして凍りついた。少女を取り囲む侯爵の手下、鍛え上げた裸体を晒す男たちが一斉に己の逸物をしごき始めたのだ。

「なっ……!!」

いずれも赤黒く怒張した巨根揃い。そのふんぞり返った亀頭は、未だすみえの膺を汚した液だくに濡れ、新たに分泌した本気汁と混ざり合って滴を垂らす。

あらかじめ命じておいたのだろう、彼らは風船をたぐり寄せると、そこから梯子とともに垂れ下がる四本のロープを手にした。

「——い、いや……あ、ああ……」

逃げようとするのだが四肢に力が入らない。咲妃は身を起す間もなく、彼らに押さえつけられ手際よく縄紐によって緊縛されてしまった。

「ああああうっ!!」

脇を締めた状態で二の腕ごと胴に縄を巻かれ、手を上げることすらできない。亀甲状に縄目が組み合わさる縛り方は、はだけた小袖からこぼれ出た乳房の麓を絞り上げるように食い込む。そしてただでさえ大きな膨らみを際立たせるように持ち上げた。

膝を立てて大きく股を広げさせられた脚は、真っ直ぐに伸ばせないように、足首と腿を結ばれている。念入りなことに、折り曲げられ密着した脰ら脛と内腿の間には、脇腹から『小さく前へならえ』の形で突き出された手首が挟まれ固定されていた。

股を閉じようとすれば手首が邪魔で、腕を動かそうとすれば余計に股が開かれる。しかもその姿勢は、はたから見ると自分から進んで股間を開き、見せつけているような淫らさに満ちあふれていた。

「うくう……ほ、ほどいて……縄、ほどきなさいっ……!!」

情けない姿勢の恥ずかしさに呻き、緊縛を緩めようともじもじ動く。だがその微かな身

じろぎは、全開した女陰の花心部を、垂れ下がった袴の裏地でくすぐることとなった。

「ひんっ！」

偶発的な擦過に悩ましく呻く。絶頂を経た性器は些細な刺激も致命的だ。さらにその悦声が合図だったかのように、咲妃の身体がふわりと浮き上がった。小気球が上昇したのだ。引き上げられるにつれ結び目が固く締まり、柔肌をきつく締めつける。首筋から鎖骨をなぞり乳の谷間に食い込む縄が、はちきれそうに膨らみ張った巨房を砲弾型に拉げた。

「くううう……痛うういいい……!!」

母乳が出るなら噴水のように噴き上がってしまふほど高まった内圧に、苦悶が漏れる。だがその表情はうっとり、陶酔の色香に弛んでいた。激しい揉み捏ねのように乳房の芯を刺激され、心地よさが溢れてしまうのだ。

混然となった苦痛と快楽に火照り肌を微震させ、縄目が食い込みから汗蜜を滲ませる。気球はその女体を床から一メートルほど吊り上げると停止した。

「なかなかの艶姿だな。このまま賑わう銀座の通りを飛ばしてやってもよいな」

彼女の無様さを奇貌侯爵が嘲笑う。縄で縛られ気球から吊り下げられたその格好は、前に咲妃が助けた怪人の犠牲者と同じ有様である。思えばそのことがきっかけとなり、奇貌侯爵との戦いが始まったのだ。

「う……奇貌、侯……しゃ……く……」

あの時の憤りが記憶の淵から這い出す。狂おしい眼差しで宿敵を睨めつけたときだった。「しかし、これは邪魔だなっ！」

大開きした股間を未練がましく隠す、金糸の花模様が淫染みにくすんだ紫袴を、奇貌侯爵の手が乱暴に掴み取る。その途端、強度に欠ける深い切り込みの入った布地から、ビリビリと裂音が響く。腰の周りに下腹にわずかにかかる程度の残骸を残し、牝液をふんだんに含んだ袴は千切れてしまった。

「あひいっ!!」

情けない悲鳴を伴い、陰部が再び晒け出される。縄で緊縛され吊り上げられるわずかな間、隠されていたただけだというのに、そこはさらに淫らさを増していた。

大きく広げられた股ぐらに、石榴ざくろのような肉裂がぱつくりと開く。その妖花のように花弁を弛ませる内側には、ぬめりたくる陰粘膜がくすんだ紅に色づいていた。

上端には絹地のように艶やかな包皮を脱ぎ下ろした陰核が硬く隆起し、胎内の疼きを伝えるようにヒクヒクと脈動を続ける。そして下端には、餓えた雛が餌を欲しがるようにぱつくりと口を開く膣が、とめどなく濃厚な涎を垂れ流す。

その蜜汁で陰毛から尻たぶまでがびっしりと濡れぬめっていた。それまで床に流れ落ち、絨毯に色濃い染みを滲ませていた液は尻穴の窪みに溜まり、鳶色とびの皺口がもじり動くと、葡萄のような粒滴を弾けさせる。

「んふううう……イヤあ……」

淫らさを増した牝股へと粘りつく視線に、褻を一枚一枚捲られるような落ち着きなさを感ずる。だが咲妃の口から漏れる呻きは、拒絶に混じってなにかをねだるような調子を含んでいた。その欲求に応えるかのように、奇貌侯爵の指が、ぐしゃぐしゃに割れ開いた淫裂から菊皺を収縮させる尻穴まで丸見えの陰部に突き立てられた。

「るむあっ!」

弛んでもまだ狭い潤口へと埋まりくる骨太な親指に危機感が湧き上がり、咲妃の腔壁がピクンと締まる。その緊張をいたぶるように、硬い節くれ立ちに柔褻を歪まされ、虐められた子供のように表情が強張る。

そしてさらに、人差し指の細い先端がもう一つの牝穴へと捻り込んできた。尻狭間に咲く肉花卉を爪の先でほじるように押し広げられ、菊皺が熱帯びて蠢く。

「くひああっ!! ち、違っ!! そっち、やめっ!! ふわああああっ!」

鳶色の菊皺が慎ましやかに窄む、なかなか可愛らしい尻穴であるが、彼女のような生真面目な女性ががわざわざ自分から見て確かめたことがあるわけがない。それにたとえどれだけ美しい穴姿であろうと、排泄物をひり出す役割は変わらないのだ。

汚い箇所を他人の指にまさぐられ、開け広げられようとしている。下手をすればその内側まで覗かれてしまうかもしれないのだ。



「ああっ！ イヤッ!!」

たまらない恥ずかしさに恐慌をきたし、咲妃は反射的に縛られた脚を閉じようとする。その反応は、挟み込まれた手首を引つ張り、脇に密着させられた腕を前に迫り出す。そして緊縛に張り膨らんだ乳房を楕円に拉げ中央に寄せた。

「くんっ!」

乳首の充血が高まり、むず痒い窮屈感に乳腺が痺れる。閉じようと試みた脚は反動でこれまでより大きく開かれ、さらに陰唇の内側を晒け出してしまったのだ。膣前庭に溜まった糊のような濃液がぬちゃりと糸を引く。

「はあああわっ!?!」

その秘め濡れた粘膜に外気が触れ、すかん、と腰から力が抜けた。ぷるん、ぷるるんと小刻みな痙攣に内腿が震えわななく、煽りを受けてすべての穴が一瞬弛緩した。その隙にである。髪をほじり、弄くつていた指は、一気にならずぶと根元までを咲妃の肛門へ詰め込んでしまった。太い杭を内臓に叩き込まれたような衝撃に火花が散る。

「んあっ!!」

いくら弛んでいるとはいえ膣よりも柔軟に欠ける硬穴は、ほぐされもせず抉られた衝撃にミシミシと軋む。強引で焼けるように熱い感触が直腸を満たしてくる。排泄と違って、解放感が訪れない。それどころか、下っ腹を突っ張らせる不快な焦燥が高まってゆく。

「ひ……ああ、嘘っ、い、いい……っ！」

それなのに妙な快感が脳を痺れさせ、咲妃は仰け反りながら悦楽を口にしてしまった。その手応えを賓客たちに見せつけられながら、ぐちゅぐちゅと双穴を掻き乱される。それぞれに楕円の軌道を描く太さも長さも違う二本の指に、前と後ろの穴肉を大雑把に引っ掻き回されると、はらわたごと体内を攪拌されるような崩壊感が咲妃の瞳を潤ませた。

ヴァギナのとろけるような陶酔感に酔いながら直腸の内壁を刮げられ、なにかを急かさ
れているような落ち着きのない惑感が理性を浮遊させる。

「んぐふっ……!!」

短くしゃくり上げるような声とともに、尻液がじゅわんと滲み、愛液と混ざり合っ
て侯爵の指を濡らす。だが穴中を掻き回しながら、徐々にその指は二本とも鉤状に折れ曲がっ
てきていたのだ。膣壁と腸壁の間を摘むように、肛門と膣口を内側から鉤指で引っかけら
れ、穴を裏返されそうな危機感に苛まれた。しかもそれだけで終わらず、咲妃の股ぐらは
上へと引き上げられてしまったのだ。

「——なっ!? やあああっ! 切れちゃぐあああはああっ!!」

転がされた達磨だるまのように頭が後ろに下がり、大股を開いた臀部が上に持ち上がる。指で
摘まれたふたつの敏感穴の狭間に己の体重が集中し、会陰えいんが千切れそうな不安に苛まれた。
内臓を体内から引き出されるような激感が襲う。

「ひあううううぐつ!! ……むうん、ううふつ!」

滅茶苦茶に点滅する意識に息が止まり、青紫に血の気の引いた唇から泡涎がこぼれる。まんぐりがえされた秘部を晒される無様を恥じる余裕もなく、指を突き挿れられた女裂を痙攣させ白目を剥く。その咲妃の耳に怪人の粘りつく声が流れ込んできた。

「朱雀大路侯爵令嬢の悩ましき姫部……誰もが一番先に味わいたいのはもつともなことだ。どうだね、ここはひとつ、ゲームでその順番を決めるというのは」

咲妃を嬲りながら奇貌侯爵は、彼らに提案した。呆然とその言葉を聞く華族たち。彼らに侯爵の手下から拳銃が配られる。

「その銃には、先ほどの演武に使ったのと同じく、模擬弾が込められている。それで——」
(あう……銃……?)

その声をぼんやりと聞く咲妃の心にえもいわれぬ不安が湧き上がった。

彼女の身体はもうほとんど逆さになっている。乳房が奇妙な果実となって逆さに熟れたわみ、細いおとがいに着してしまっていた。乳肌を自分で舐めしゃぶることもできそう。腕を縛る綱に引かれて、上空の気球も大きく前にのめっていた。

耐え難い拷感を和らげようというのか、白濁した飛沫をびゅっ、びゅ! と噴き上げる。その膣穴を空いた手で指さしながら奇貌侯爵は言葉を続けた。

「——この穴を狙うのだ。見事命中させ、弾丸を彼女の膣内へ撃ち込んだ者。その者が朱

雀大路咲妃嬢を最初に召し上がる権利を得る！ さあよいか諸君、ゲームの始まりだっ!!」

「——く、むああ……な、なにを……」

模擬弾の威力は、自分で撃つてみた感触で想像がつく。弱いといっても、敏感な局部に当てられたら……。どのような痴態を晒してしまうのだろうか？ それ以前に、まだ彼らの慰み者にされるのかと思うと、気が変になりそうさ。

怪人の言葉に背筋を総毛立たせ、無理と分かりながら拒もうとする咲妃。しかしもう開始は告げられてしまった。てゅぼんっ！ と小気味よい音色を鳴らし、侯爵は根元まで埋め込んだ指を、咲妃の前後穴から引き抜く。

「はああああつっ!!」

持ち上がっていた尻が支えを失い、振り子のように勢いよく戻る。一気に体重がかかった縄目がきつく締めまり柔肉を締めつけた。

「んぎいいいいいいっ!」

乳房や太腿が腸詰め肉のように引き絞られ、重く疼く痛みが激化する。その有様で咲妃の身体は吊り下げられたまま後ろ向きに動き始めてしまった。

臙脂の小袖は大きくはだけ、美しい鎖骨を浮き立たせた細肩を露わにしている。半回転した身体の勢いをまだ抑えきれぬ、張り実った巨乳がゆさゆさと揺れ続け、玉のように浮かんだ粒汗を弾き飛ばす。そのツンと頂上を尖らせた美山の下裾には、くしゃくしゃに引き

下げられたブラジャーの残滓が未練がましく貼りついていた。

この期に及んでも、細胴をまとめる帯だけが律儀なほどに乱れていない。だがその下に庇う紫袴は、わずかに腹部を隠すだけで無惨に千切り取られていた。

動きをよくするために小袖は初めから腰丈で切り落としている。彼女の下半身を隠す物はなにひとつなく、足に履いた編み上げ靴が淫靡さを際立たせていた。

縄紐に縛り上げられ大股開きを強いられている座り姿勢で、辱めに無理咲きさせられた牝穴を無防備に晒し、ふわふわと宙を漂う咲妃に男たちがにじり寄る。

秘口に突き刺さる血走った視線にぞわぞわと肌を粟立たされる。全身を拘束され、なにひとつ抵抗できない。しかも淫媚香に発情させられた肉体は様々な辱めに狂わされ、自分でももうどうにもならないのだ。

「は……あ……あああ……」

逃れる術もない肉体へと向けられた銃口に、恐怖と、そして奥壺でわななく快楽への欲望が渦巻いた。そして――。

バギューン！ズギューンッ！！

狙い撃つ無数の銃声が鳴り響く。普段の彼女なら撃たれる前に着弾点を予測して避け、反撃の銃弾を叩き込むだろう。しかし天才的な拳銃使いも、いまは情けない射撃の的としてなす術なく吊り下げられているだけである。

(ああ……!! だめっ! んぐうっ!!)

避けようとしても無駄なのだが、悲しいかな向けられた攻撃に本能が勝手に反応してしまふ。そうすると大して動きもしないのに縄目がギリギリときつく食い込み息が詰まる。その時、ただでさえ縄縛りに圧縮され感度が高まっている乳首に、ドチュッ! と湿った着弾音を鳴らし銃弾がめり込み、肉が爆ぜそうな痛悦に見舞われた。

その勢いに乳房がぶるると大きくたわみ、谷間を打ち合わせながら跳ね暴れる。

「はんっつ! つああああああつ!!」

もう散々に昇り続けこれまでと思つた意識がさらに跳ね上げられる。すると、当たつたのは胸だというのに、開脚の中心からささやかな液飛沫がピチューッと噴き上がった。

その反応に華族たちからおおっ! と感嘆のどよめきが起こる。途端に股間だけではなく胸まで射撃の的とされ、バギユンッ!! ズガンッ! と銃声が鳴り乱れた。

ロープをギンギンと食い込ませ膨らみを増した美球がいくつもの銃弾に弾かれ、柔房の表面にたくさんの窪みが生じる。だが持ち前前の弾力さでその弾粒を跳ね返すと、巨乳は左右互い違いに上下し、甘臭い汗を撒き散らす。

「くあああつ! 胸だめっ!! お乳、もうやめてええっ! だつ、……はうううっ!!」

その激感に咲妃はたまらず懇願する。だが拒む口とは裏腹に刺激的な心地よさが乳芯を痺れさせ、股壺からは喜液が溢れ噴く。

「ほう、吾輩の逸物が気に入ったようだな」

令嬢の熱い眼差しを受け、巨根の持ち主が興奮気味に言う。

「う……？ な、なに……を……わたくしは……そんな、もの……」

誇り高き國護職ともあろう者が、そのような浅ましい真似をするわけがない。彼女にわずかに残された理性が、毅然と言いつ返し返そうとした。だが、しどろもどろの声は媚びたように鼻にかかり、眼差しはなおさら熱っぽく、龟头を舐め回すように凝視してしまう。

「なんだ、もうとろとろではないか。では、諸君、お先に失礼させてもらおう」

ゲームはうやむやになったが、誰が最初に咲妃を犯すか決めなくてはならなかった。ならば彼女本人に選ばせるしかない。

じゅくん、と膣口から染み出てきた愛液がその返事となってしまった。膝を掴まれふわふわと浮き漂う身体を引き寄せられる。

「はああああ……いや、それだめ！ 大きいのイヤっ——」

それでも理性の欠片はなんとか言葉を繰り、近づく勃起を拒もうとする。だが股唇がぬぷりと龟头を包み込むと同時に、

「——はああ……イ、イイッ！」

咲妃の態度は喜悅一色となってしまう。昨日処女を失ったばかりというのに、あてがわれただけで壁襷がうねり、膣が勃起を飲み込んでゆく。

「くひいいいいい……あう、挿いる、ああ、太いいはあああうっ!!」

弛み口をさらに押し広げるほどの太い肉に、牝筒へと押し入れられ、声の裏返った悲鳴が漏れた。大きく傘開いたカリ首が襲の一枚一枚を捲りあげ、ヌズッ、ヌズッ、と進むたびに、硬棹の脈打ちがどくどくと筒壁に伝わってくるのだ。

ただ処女膜を突き破り、子宮を乱暴に突き上げるだけだった銃身の冷たい硬質さとあまりにも違う、弾力に満ちた生剛直の逞しさに咲妃の背筋を熱流が駆け抜けた。

「あぐうんはああうっ!」

待ち焦がれた棹挿入に、咲妃は牝猫の瞳を感涙で滲ませ、悦楽を貪る発情した牝となつて嬌声を垂れ流した。その喘ぎが男の腰使いを煽り立てる。ズンと押し込む動作に熟れた奥壺をぐにやりと突き上げられた。

いくら大量であろうとも小粒な銃弾とは比較にならない、極太い一本の重々しい突撃がはらわたを響かせる。なにがなんだか分からない。一気に意識を弾き飛ばされた。瞬時にして視界が白い閃光に塞がれ、なにもない空中に放り出されたような身を包む。縛られた手で、慌ててなにかにしがみつこうとするその全身を、時間差で激悦が荒れ狂った。

「ひぐあああああああああう!!」

ようやく味わえた生勃起の突き込み、子宮が感極まる。鈴口にこじ開けられた頸口からは喜びの涙のように、じゅぶじゅぶと牝蜜が溢れこぼれた。

(ふあああ、これ……!! あくう、ああああ、いひいひいひいッ!)

冷たい鉄ではない生の快樂に、咲妃の本能が狂喜してしまふ。脳を弾く絶感に歪みながらも、彼女の顔は淫らな笑みをだらしなくとろけさせている。

そして膣壁ははち切れそうに押し広げられながらも、もうこの剛直を逃すまいと、激しく痙攣しながら棹を握りしめた。

「ほどよく絡みついてくるぞ。士族上がりの娘にしてはなかなかのものだな!!」

締めつけに氣をよくした男根にぬめりをくちやくちや鳴らされ、小氣味よいストロークで膣を搔き乱された。

一旦とば口まで抜けかけた棹肉が、突き出される腰に再び押し込まれる。先ほどより幾分強く先端に子宮を突かれ、視界が白く染まった。

「ひゃぐあッ!」

互いの恥骨が激突し、剛直が根元までみっちりとは緩穴に埋まり込む。矢尻のように尖った亀頭に蜜壺を上げられ、咲妃は吠えるような嬌声を上げた。

(はあああああう! 奥うあたるっ、当たりすぎて潰れちゃうふううっ!!)

ゴンゴンと子宮を突き上げられるのが嬉しかった。内臓にまで響く鈍痛が跳ね上がり脳裏に届くころには快感となつている。ストロークが激しさを増すことにびぎゅっ、ぶぎゅっ、と溢れくる蜜液が攪拌され、陰唇びらの狭間から白濁した泡汁を吹きこぼす。

「まるでブランコのようなだ。揺れながら感じているぞ、この娘っ！」

まさに西洋の遊戯具のように、咲妃の身体は突き込みの激しさに揺さぶられていた。ズンと突き上げられると、四本のロープに吊り下げられた身体が後ろに滑ってゆく。

「——!! はあああっ!? やらああっ！」

ずるずると勃起が引き抜かれ膣内が空虚に見舞われる。思わず咲妃は慌てた悲鳴を漏らしてしまふ。だがその動きは鈴口が小陰唇に辛うじて貼りついてしているギリギリで停止した。

「んんうっ!!」

秘唇と亀頭が微かに触れ合うだけの、物足りなくすぐったいわずかな時。それが永遠に続くのではという不安にくぐもった呻きをこぼす。だが振り子のように彼女の身体は、再び男目がけて戻ってきた。

抜けかかった亀頭がぼるんっ、と調子よく膣口にはまり込む。もずもずとじれったく壁筒を刮げる刺激に物足りなさを感じるが、それはすぐに加速を増し、ズクズクと極太で狭穴を押し広げる突入となった。

「はわっ、わわわあああああうっ!」

最初にゆっくりだった分だけ長く感じる男根の全長が胎内に収まりきった。そして振り子の戻りで勢いのついた股ぐらだが、彼女の体重を乗せて男の恥骨に追突する。

「ん——ッ、くあっ!」

ぶずん！ と重い振動に子宮を窪まされ息が詰まる。甘酸っぱい濃臭が鼻腔に滲み、脳天まで駆け上がった。後を引くような歡喜にぶるぶると身をわななかせたとき――。

「楽しんでな。そろそろ我々も混ぜてもらおうか、お嬢さん」

その様子を眺めていた他の華族たちが、もうこれ以上待てぬとばかりに己の男根をしごき立て、咲妃の肉体に群がってきたのだ。

早速背後から抱き留められ、揺れ弾む胸を揉みまさぐられる。

「ほう、なかなかしつかりした手応えだな。なにを食したら、これほどまでに大きくなるのだから……いやらしい乳房めっ！」

「んやあああああ！ だめ、乳首、ダメええええ!!」

クリクリと小粒を転がされる悦感に、甘臭い香汗を飛び散らせる。悶え震え背筋を反り返らせた途端、咲妃は彼らの手で仰向けに近い状態に押し倒された。とはいえ、縛られた手足はそのままである。まるでその姿は、おむつを替えられる赤子のように大きく開いた股を見せつける、相変わらず無様な姿勢だ。しかも膣には巨根が深く埋まり、小気味よいストロークで内襲を刮げ続けている。

そして背後から揉まれていた腕に揉まれていた乳房は、いまや指に代わって大勢の男根に捏ねられていた。弾力に満ちた大きな房をぐにやりとへこまされると、焼け棒のような熱さが肉の奥にまで染み通る。

「はくあつ！」

生々しい体温に驚き身じろぐと双球が互い違いに、ぶるん、と揺れたわみ、興奮に張りつめた乳首の突起がヒクヒクとわななく。

硬い勃起は鉄芯の上に生ゴムを被せたような異様な柔らかさを兼ね揃えていた。寒天のような乳肌に着着するその触り心地だけでも意識をそこに惹きつけられてしまう。それなのに、浮き出た太い血管を蠢かすどす黒い幹に、どくつ、びくつ、と強い脈打ちで充血勃ちした敏感突起を弾かれると、理性が砂のように崩れ、もつと激しくされることを望んでしまう。

「ふあああんん……もおお……あくあああ!!」

だが這い回る先端から先走った液で、過敏肌をヌリヌリと擦れ合うもどかしさに焦らされ、咲妃はねだるような甘声を張り上げる。

その声に答えるように、浮き上がった彼女の身体へと男のひとりが馬に乗るかのようになり、跨ってきた。

「くはわっ！」

体重を乗せられたわけではないので重くはない。しかし、男尻にのしかかられる屈辱は色欲に狂っていても心を苛む。だがそれも生臭い恥垢臭が鼻腔を満たした途端、霧散してしまった。

双房を左右から他者の男根に押し寄せられ、ギョッと密着した深い胸谷を、跨った男のふんぞり返った勃起に挟り出されたのだ。尿口からどくどくと先走る牡汁は、見る見るうちに谷を満たし、緩やかに抽送にヌチヌチと捏ね回される。

「はうあああつ、あうお乳イイいっ！ そんなあつ、イイイイいっ！！」

常に肉同士が密着し蒸れふやけた敏感谷を、ぬるぬるの擦れ感が掘り返す。剥がれ落ちたカサ裏の汚れが溶け込み攪拌された腐汁は、えも言われぬ悪臭を泡立て、咲妃の脳裏を痺れさせる。

歓喜と嫌悪に情欲を突き上げられ、未練がましく肌に貼りつく濡れ小袖を振りほどかればかりに身を揺さぶる。それに負けじとしごき立てる幾本もの男根に生肌をなすられ、全身をねばねばしたカウパーで塗られたくられゆく咲妃に、最悪の時が訪れた。

「嬉しいか、朱雀大路咲妃。この宴はお前のために催したのだ。お集まりの方々に、存分に可愛がってもらえ！」

わずかの間に誇り高き國護職の娘を淫女に変え、帝国の名だたる華族を陵辱者へと作りかえた淫媚香。その恐るべき魔薬を生み出した男がゆっくりと歩み寄ってきた。そして股間から隆々と屹立した剛直を握りしめ、官能に呆けた咲妃の顔面に押しつけたのだ。

「ぬぷわっ!!」

図太い剛直がべちよりと張りついた。生臭い異臭が鼻を突く。昨日口を汚したおぞまし

い極太。憎き宿敵であり諸悪の根源の男根である。

(そう、よ……く、くい……ちぎっちゃえ……)

ぼんやり霞んだ頭の隅から、必死に叫ぶ声が聞こえた。

(う、くう……そう……これ、を……)

その声に咲妃は朦朧となりながら反応した。懸命に焦点を合わせ、目の前の敵棒を睨みつける。だが、その瞬間だった。弾力的な尻房の狭間にピタリと硬い物が押しつけられた。

「——!? ひうっ!」

火照った熱肌が冷たさに竦み上がる。非人間的な鉄の感触。だが咲妃の身体はその触り心地を知っていた。

(ああ……じ、銃口……!?)

生々しく心に刻まれた昨日の記憶。彼女の膺に押し入り、純潔を奪った荒々しい鋼が今度は後ろの穴もいただこうと密着している。

「そうだよ、お前の一番好きな物だ。——さあ遠慮せず、存分に味わいな!」

咲妃の心を読んだかのように、膝立ちで銃把を握る男が言う。その声に身を震わせた刹那、グリーンと皺襞を抉られる。

「だっ、あああんっ!!」

反射的に尻が窄まり、硬く口を閉ざそうとする。だが男肉に甘やかされゆるゆるにとろ

けた肉体は、込めるそばから力が抜けてしまう。奇貌侯爵の指に齧られ綻びを生じていた菊穴は易々とこじ開けられてしまった。

「ひい！ ひいああつ、ひあつ!! くあはああ！」

内臓壁を抉り返されるたびに咲妃の口からは悲鳴が吐き出され、全身を硬直させるように大きく震わせる。その時に肛門もギュッと強く締まるのだが、鉄棒はお構いなしだった。穴を狭めることで余計に感触を高めてしまった咲妃を狂乱させながら、ずじゅずじゅと腸液のぬめりを鳴らし、銃身は根元まで埋まり込んだ。

「ぐひゅうつ!!」

ぶずん、と最後の一押しでS状結腸に突き込まれ、目のくらむ衝撃に震えわななく。甘く熱を持った汗が大粒となり肌を激しく滴り落ちる。口腔からこぼれ出した舌先はもうあと少しで侯爵の鈴口をしゃぶってしまいそうだ。

「お前の尻の拳銃だが、それにも淫媚香が仕込んであるぞ」

その様子に笑いだしそうな声で奇貌侯爵がぼそりと伝える。直接体内に注入されたこのおぞましい催淫薬の効果は、ヴァギナでいまなお味わっている最中だ。このうえアナルまで犯されてしまったら……。想像すらしたくなかった。今度こそ狂ってしまう。

それなのに、男はカチリと激鉄を起こし、発砲の準備を整えたのだ。しかも、さらに恐ろしい事実を告げる。

「ん……？ なにか先っぽに当たるな。これは……」

銃身の先端にコツコツ当たる硬い小さな感触が腸壁にも響き、もぞもぞと落ち着かない感触をもたらす。はっ、と思いついた咲妃の顔が引きつった。それは射撃的にされたとき、肛門に潜り込んで腸内を飛び跳ね回った弾丸である。

いま撃たれたらふたつの弾丸が衝突し割れ砕けるだろう。そうすれば、一気に二発分の淫媚香液が腸壁にぶちまけられるのだ。

「ヒアッ、だめ！ 撃っちゃ、はぁあうっ!!」

必死に懇願したのとほぼ同時であった。ぐぼんっ！ とくぐもった銃声が尻谷で響く。弾丸が射出される勢いに押し広げられる腸内を、弾き合う複数の重粒に跳ね回られピシビシと壁壁を叩かれる。

「はんんん、んぐはぁあぁあぁあつ！」

その激悦に呻く最中、即効性の衝動が視界を紫に染めた。ぎゅむん、と膣が収縮し、膣口が勃起に嘔みつく。腸壁から吸収された淫媚香は早速効果を發揮し、牝の悦欲を全開にしてみたのだ。

（ひぁあぁあぁあ！ 変んんう、とまらなひ、これ、お尻い、変ッッ!!）

自分ではだめだと思うのだが、高まる欲望が抑えられない。熱っぽい視線は淫らにとろけ、目の前の餌を艶めかしく見つめる。小さな唇を精一杯に大きく開くと、数多くの婦女

を辱めた忌むべき勃起を、咲妃は自らくわえ込んでしまった。

ただ一度の舌奉仕を思い出し、窄めた先端でカリ首をほじる。ちゅばちゅばと吸いつき濁水を啜ると、喉に染みるえぐい味わいに意識をめろめろに溶かされた。狭い口腔を占める剛直の逞しさに頬の内粘膜を刮げられ、『顔が犯されている』という感覚が被虐的な興奮を高める。

(あふう……殿方の逸物ううっ！)

官能に眩暈を感じながら、咲妃は棒幹から裏筋まで大胆に舌を這わし、ちゅばちゅばと淫らな音を立て舐めしやぶった。

彼女の積極さに煽られるように、華族の淫動が熱を増す。直線的だった抽送に円を描くような動きが加えられ、突き込まれるたびに襞を捲り返される。

(るああああ…… そんなところもっ、んいっ!!)

まだ攻められていなかった箇所をグリグリと擦られながら、全身をまさぐる肉勃起に、入れ替わり立ち替わり乳房を捏ね揺すられる。

「むふああああん！」

悦びの声を上げながら自分からもぐねぐねと尻を蠢かし、細くくびれた腰を艶めかしく振りまくる。すると汗濡れてねっとりとなめらかくどろけた乳房までもがむにむにと揺れ動き、谷間を掘り返す陰茎との擦れ合いを複雑に彩る。



びちゅびちゅと乳一面を濡らす大量の先走りは、生臭い官能臭で脳裏を痺れさせながらぬめり、柔肌を歓喜にわななかせた。その悦楽感に、いやらしい穴へと変えられた菊皺がもずもずと蠢動し、突き込まれた銃身を射精を促すかのようにしごき立てる。

「きひうううっ!! くわふあっ!!」

その奉仕に応え、ドムン!、ドムウンッ!! とくぐもった銃声を鳴らし淫媚香弾が連射される。重苦しい衝撃で体内を揺さぶり跳ね回りながら、弾丸は精液の代わりに強烈な催淫液を撒き散らした。

「ふんああああ……」

その液が染み渡り、褌の細胞ひとつひとつが覚醒されたように敏感度を増した。みつちりと埋まる銃身の鉄肌に粘膜を突き込まれると、気が変になりそうな激悦に尻孔を揺さぶられ、直腸を際限なく淫乱にさせられる。溢れ返り菊門から滲み出そうになった淫媚香液を一滴も逃すものかと褌壁が蠕動し、硬い銃身までをもグイグイと引き絞った。そこにまた歓喜の銃弾が腸壁を跳ね狂う。

「くふううう! お尻イイ、ひいいいれすふうううっ!!」

ビクンビクンと痙攣する身体に胸の乳房が跳ね乱れる。落ち着けようとしたのか、もつと乱れさせようというのか、硬勃ちした乳首が乳球の中に埋没するほど、剛直の先端に胸を穿られる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>